

むち  
ムキ  
熟女王  
は勇者  
の

チ○ポ  
に  
惚れ  
ちま  
った  
の  
せ



エレクトリックシーブ





「お姫様の護衛だからってこんでいっままで  
入るのを許したけど……」

「フンッ 何だか頼りないねえ、

表にでなッ！ あんたがお姫様に相応しいかどうか試してやるよッ！」







ガシヤンツ!

「くツッ! な 中々やるじゃないか

見た目の割になんて力強い剣を振るうんだい」



「あたしの負けだよ」

姫様のそばにいらることを許してやろうじゃないか」

「何だい？ 勝ったんだから褒美をよこせ」

「だつて？ いいだろ？ なんでも望みのモノを」

「言いな」





ぐぐぐぐ……むちちちッ

「はあッ……どういいうつもりだい。」

「格好にさせて辱めるなんて酷い野郎だね」

あたしをこんな

（……男の前で裸になるなんて何年ぶりかねえ。こんなことなら  
伸び放題の下の毛もちゃんと手入れしておくんだつたよ……）



「ちよッ！ そんなに近くによるんじゃないよッ！  
いい匂いがするだつて？ ふざけんじやないよ  
こんな年増素っ裸にさせて何言つてんだいッ！」

（ああ・・・恥ずかしい・・・身体中を舐めまわすように  
見られちまつてるよ・・・鼻先がアソコの毛に触れそうになるまで近づいて  
あたしのメス臭を嗅がれちまつてる・・・  
はあ・・・何だか変な気分になつて来たよ・・・）



「ああ・・・身体に似合わずなんてたくましい  
ものぶら下げてるんだい。

あたしのハダカを見てこんなになっちまってる  
ってのかい・・・まったくんだ勇者様だよ」

「啜えろってのかい？」

「いいさ、負けたんだから何だって聞いてやるさ」





むちゅッ、ちゅッ、レロレロ

「はあ、それにしてもすごい太さだねえ……」  
ふぐッむぐぐぐぐッ

あたしでも全部飲み込めないよ」

（ああッ、口の中でビクンビクンで脈打ってるよ

ああ……イヤだったのにアソコが痛いちまう……）





ぐぼッグポッぐぼッ ふんんッじゅほほほ、  
じゅるるッじゅるるッ

(あああ、チンポ啜えるの久しぶりい・・・ああうまい・・・  
あたしを負かした男のチンポしゃぶっちゃまってる・・・  
ああッ悔しいのになんてうまいんだい・・・  
やばいよ、お姫様の思い人なのにこいつの  
チンポに惚れちまいそうだよ・・・)





むぎゆうゆうッ

「くッ！　なんて手つきだい　剣だけじゃなくて、  
こっちの方も相当の手練れだねえ」

ぐにゅにゅにゅッ　ちゅばッちゅばばッ  
「あううッ！　あたしの乳をそんなにうまそうに舐めて、  
ああッ！　そんな、乳首までッ　はッ激しいよッ  
そんなに強く吸ったら乳首が伸びちまうよ！





ブルルツ  
「ツく・・・ふうツ・・・」(軽くイッちまったじゃないか  
こんな若造におっぱいだけでやられちまうなんて  
初めてだよ・・・)」



がばあ……

モワワワツ

クチチツ

「ああんツッ！ も、もう勘弁しないかいツ？  
こんなことまでさせられるなんて、仮にも  
あたしは女王なんだよツ！」

（アァ……）

あたしのアソコ全部見られちゃってる

、伸び放題のマン毛も、ピンピンに勃起したオサネも、

肉厚のラビアも、だらしなく開いちゃまった膣孔も、

ぷっくり膨らんだ肛門まで……）



「うううッ……そんなにじっくりと見ないでおくれ  
自分でだって、そんなにまじまじと見たことなんて  
ないんだよ……」

「エロくてキレイだったって？ 小僧が生言ってるじゃ  
ないよッ、ひっぱたくよ！」

（ああ……見え透いた言葉だったのに、  
なんであたしのアソコはこんなに濡れちゃうんだい……）



じゅぶるッじゅぶぶぶッ

「ふあああッ! やッ、ウグッああッああッ」

(ああアソコ嬲られてるッ、そんなッ 中まで

舌が這いずつてくるッあたしのオマンコ味わいつくされ

ちまううッ!)

ちゅッにゆにゆにゆッ れろお ぬりよりよりよッ

「ほおおッおおッ! そこはダメだよおおお

オサネの裏筋ッ! そこは弱点だよッアアッ!」

(女の感じる所を熟知してるッ このあたしがこんな

小僧のいいように感じさせられちまってるううッ)



ずぞぞぞッ カリッ

「ヒギッ?」 ダメッ!

イ イッちまうう イクイクッ!

ビクビクビクッ

「あはあッはあはあはあ・・・

まいったよ・・・完全にあたしの負けさ。

だからもう勘弁しておくれ・・・これ以上やったら

姫様に顔向けできなくなっちゃうよ・・・」



「はあああッあうッあんッあんッあんッアッアッ!」  
パンッパンッパンッパンッ ぎしッぎしッぎしッ  
「ひらひらッきんっきんッううう 奥マンコ  
きんうううッ!」

ズドンッズドンッズドンッズズズズ  
「きひひひひっ深いひひひお奥まで届いてるッッ  
ひああああッああッ!」



ぐりぐりぐりんツゴリユツゴリユツ

「ほおおッおおおッ

ひツヒギツし子宮ううゴリゴリ

されてるううあダメダメだめえーッ！」

にゅぶにゅぐぐッ

ズグツズグツズコッ

「いっいっいっすごっいいッ

ああ

やつちまったセックスやつちまったたよおおおーッ！」



ズツズググツ　グボツグリツグボツ

「おおおおうツ！　奥また奥うーッ

ああダメツ！　あんたのチンポすごすぎるツ


勇者チンポすごすぎるうううーッ！」

「あああだめだめツ　姫様の男なのにツ

姫様に入るはずだったチンポなのにツあああ

気持ちいいいいッたまんないよおおーッ！」





ぐりんッぐりんッゴリユッゴリユッゴズッ  
「あんッあんッあんッはあああッ まんこッ  
おまんこッがあああ ああちんぽ勇者のちんぽ  
の型がついちまううーッ！」

びゅぐるッどくッどくッどくッ

びゅびゅーッ

「あああッ出てるまた出てるッおオマンコの  
奥の奥で精液出されちまつてるよーッ！」

「ひいいああッ いいイクッまたイクッ

イクうーッ！」

ビクビクビクッ



ズパンツズパンツズパンツ

「ふぐああああッ! もッもうだめッ か

勘弁しておくれッ 溶けちまうおまんこ溶けちまう

よおッ! これ以上あんたのちんぽに熟マン

馴染ませないでおくれッ!」

ぽこんッぽこんッぽこんッ

「ひひひひッ! いひひひくううまらいくうううう

ーッ!」 ビクビクビクッ

「じ。。。じめッ死んじまうよおおーッ」



「ふんんっんぐっつふぐううう」

ぬちゅうううッちゆるるるッ

じゅちゅッ

「ああ あんなに沢山出したのにまだ元気なんだね  
まったく大した男だよお」

ぐぼっぐぼっぐぼっ

「こ こらあたしの口でピストンするんじゃないよッ  
がきよッがきよッがぼぼッ





(ああ・・・女王ともあるう私がかんなことされて  
感じちまつてるよ あんなにオマンコしたのに  
また疼いてきちまつた。 太さも匂いも固さも  
最高だよこのおチンポ、ずっと啜えていたいよ)

ぷっ ぷしゃあああああッ

「おほほほッおふうッ！」

(ああ・・・あたしのマンコが喜びすぎてウレシィヨン  
しちまつてるよお) ぶるぶるぶるッ



「ふうーッ どうだい湯加減は？」

「やつと二息つけたよ・・・ 数えきれないほどやられちゃまって死ぬかと思ったわ。」

「まったく、こんなオバサンによくそこまで発情できたもんだ」

「ぶふッ 「あんッ あんたの子種がまだマンコに残ってたみたいだね。 あんなに中だししまくって、できちゃったらどうするつもりだい」






「孕ませるまでまだまだやりまくるだつて?」  
駄目だよ・・・  
今夜限りにしないと・・・  
あたしとあんたはうまく  
いっちゃいけないんだよ」

ああんッ

「え? もうオレの女だから、  
あたしに拒否する  
権利はないだつて?」







（くううう・・・どうしてこんなこと言われてるのに  
あたしの子宮はうれしくって  
じくじくしちまうのかねえもう身体のほうは  
完璧にあいつのチンポの虜に  
なっちまったようだよ・・・）

「あんたに着けられたこの乳首とビラビラのリングが  
その証って訳かい・・・ああ・・・ダメだよ・・・本当に、  
また濡れてきちまったじゃないか・・・」



パーンパーンパーンッ

「あんッあんッアンッアンッアンッああんッ！」  
ずごっずごっずごっずごっずごんッ

「はあああッああッ

いいッいいッおちんぽ

イイツ 気持ちいいーっ！」

ばこんッばこんッばこんっ

「ひいいいいッ お奥ッ奥がいい

のおーもつと突いてめちやくちやに

してえーっ！」



ごっずごっざごりゅううううッ

「いいいいイクイクイクグうううううーッ！」  
ビクビクビクビクビクーッ

ふしゃあああああッ

「あああッ お おチンポ

おチンポ最高ーッ！」





「んんんんッぐほッぐほッぐほッ ンもうあんたつてば

どこでもしやぶらせるんだからあ……」

じゅほッじゅほッじゅほッ

「ふうう ああなんてうまいちんぼなんだい

ずっと啜えていたいよ」

ぬじゆるッぐちゅっぬちゅうううう

「ああッ 姫様がそばにいるつてのに、起きちまう

かもしれないつてのに、もうあたしは何より

このチンポが優先なんだね……」



「ふぐうつふぐつつふがツつふぐツつ ああああ

あたしだけのチンポだよ。ほかの誰にも

しゃぶらせやしない姫様にだつてね。

このちんぽでオマンコするのも世界であたしだけさ」

「ああ、とんだあばずれさ。情けないつたらないよ

でももうだめさ。このチンポを見たらオマンコの

こと以外考えられなくなる。

もうあたしはこのちんぽの奴隷なんだ」



ぐちゅつぐちゅぐちゅんッ

「ああッ出すのかいおちんほ汁でるのかいッ！  
ちようだい特濃おちんほ汁飲ませておくれえええッ！」  
びゅびゅうううッびゅぶぶぶーッ

ごきゅッ んぐッ んぐッ んごごッ

「ああッ素敵ッこんなにいっぱい、感無量だよお  
さあこれで終わりじゃないだろ何でも命令しておくれ  
どんな卑猥なことだってするよ。

あたしの口マンコも乳もアソコも全部あんたの好きにして  
いいんだからね」





「そうさ、姫様にばれたつてかまやしなないよ

あたしが心から願っていたのはこれだったのさ！」

「もうどこまでもあなたのチンポについて行くよ。

今からあたしは女王じゃなくて

あなたのおチンポ専用肉奴隷なんだからね！」

オワリ



